

公共図書館におけるビブリオセラピーの実態とその特徴

福田 旭

メンタルヘルス問題を抱える人口が増加傾向にある現代社会において、ビブリオセラピー(bibliotherapy)は公共図書館のメンタルヘルスケアサービスとしてその潜在的な価値が見直されている。ビブリオセラピーとは、厳選された読書媒体を用いて、自己理解を深めることで、メンタルヘルス問題の治療を支援する心理療法である。しかし、ビブリオセラピーの定義は未だ曖昧で、公共図書館でのビブリオセラピーの実施事例は少なく、地域によって内容はさまざまである。公共図書館において、利用者にあったビブリオセラピーを提供することは、今後ますます重要となる。

本研究の目的は、公共図書館におけるビブリオセラピーの実態とその特徴を体系的に解明することである。そして、研究目的を達成するために3つの研究課題を設定した。(1)公共図書館ではどのような種類のビブリオセラピーが実施されているか、(2)公共図書館における各種類のビブリオセラピーの事例の特徴は何か、(3)公共図書館におけるビブリオセラピーの事例は地域によってどのような特徴があるか、である。

研究方法は、包括的文献レビューと事例分析の組み合わせである。図書館情報学領域における複数の文献データベースを用いて抽出した298件の文献を対象に、包括的文献レビューをすることで97件の事例を抽出した。さらにその事例を対象として、公共図書館におけるビブリオセラピーの事例を種類別と地域別に分析した。

研究結果では、第1に、公共図書館におけるビブリオセラピーの事例には7つの種類があることがわかった。第2に、これら7種類のビブリオセラピーについて、各事例とともにその特徴を詳述した。第3に、6つの地域によって異なるビブリオセラピーの特徴を事例に基づいて解明した。

総合考察では、研究結果から浮かび上がった7つの分類と6つの地域におけるビブリオセラピーの特徴について考察を加えた。

結論で、公共図書館におけるビブリオセラピーの可能性を論じたうえで、今後の展望として、ビブリオセラピーの提供体制と経費、図書館員の視点、利用者とその周縁研究、さらにはビブリオセラピーの理論面やその有効性に関する研究が、今後の重要な課題になることを指摘した。

以上のことから、本研究は公共図書館に関わる新たな視座を提供したといえる。その視座は、今後の公共図書館におけるビブリオセラピーを通じて、利用者のメンタルヘルスケアに貢献できる。

(指導教員 小泉 公乃)